

カトリック松が峰教会

栃木県宇都宮市松が峰1-1-5

栃木県宇都宮市の中心部にある「大谷石文化」の象徴といえる建築が、「カトリック松が峰教会」である。

大谷石文化は、同市原産の大谷石が長い歴史のなかで市民生活や産業などに根付くことで築かれ、2018年に文化庁の日本遺産に認定されている。建築への活用も大谷石文化の一つで、同市の大谷石は1923年、東京の旧帝国ホテル本館で使われてから広く知られるようになり、奇しくも竣工披露当日に遭遇した関東大震災でほぼ無傷だったため、その耐久性が注目を集めた。

それから9年後の1932年、「カトリック松が峰教会」が完成。今も大谷石独特の柔らかさとあたたかさを兼ね備えた表情を見せる。設計はスイス人のマックス・ヒンデルで、大正末期から昭和初期にかけて日本各地で聖堂などを手掛けた。施工が宮内建築事務所（宮内初太郎）、石工棟梁が安野半吾。鉄筋コンクリート造一部木造2階建てのロマネスク・リヴァイヴァル様式で、内外壁に5~10cmの厚さの大谷石が張り付けられコンクリートを覆う。半円形の「ロマネスク・アーチ」が構造、空間の分節、開口部の意匠、屋内外の装飾に多用されているほか、日本では珍しい4層の双塔、石のレリーフの文様など、ロマネスクの建築言語で統一され、かつ大谷石文化が巧みに取り込まれているという。1998年には国の登録有形文化財に認定された。

双塔が存在感を強くしているが、街に溶け込んだ親しみやすい市民の教会という印象を受ける。設計者のヒンデルは、故郷のスイス最大のロマネスク建築、グロスミュンスター大寺院を思い浮かべてデザインしたといわれる。双塔を見上げ、その志に想いを馳せてみた。



罪を外部に吐き出すなどの象徴的意味を持つ「ガーゴイル（雨どい）」は、ロマネスクやゴシック建築の大聖堂によく見られ、怪物をあしらったものが多い。そんななかでカトリック松が峰教会のガーゴイルは、ユーモラスなカエルの彫刻が使われている。同教会の第3代主任司祭、アルマン・ブジェ神父が作家の宮沢賢治と親交が深かったことから、宮沢の童話『蛙のゴム靴』の「カン蛙」をモデルに制作したものである。人間が履く憧れの長靴を手に入れたカエルがかたどられている。

